婦人と新社會

山田わか主筆

第一號

目次

每月一回一日發行　大正九年二月十日納本　大正九年三月一日發行

東京　東洋出版社發行

山田わか女史著

新刊

戀愛の社會的意義

四六版三百卅餘頁
定價金壹圓八拾錢
送料拾貳錢

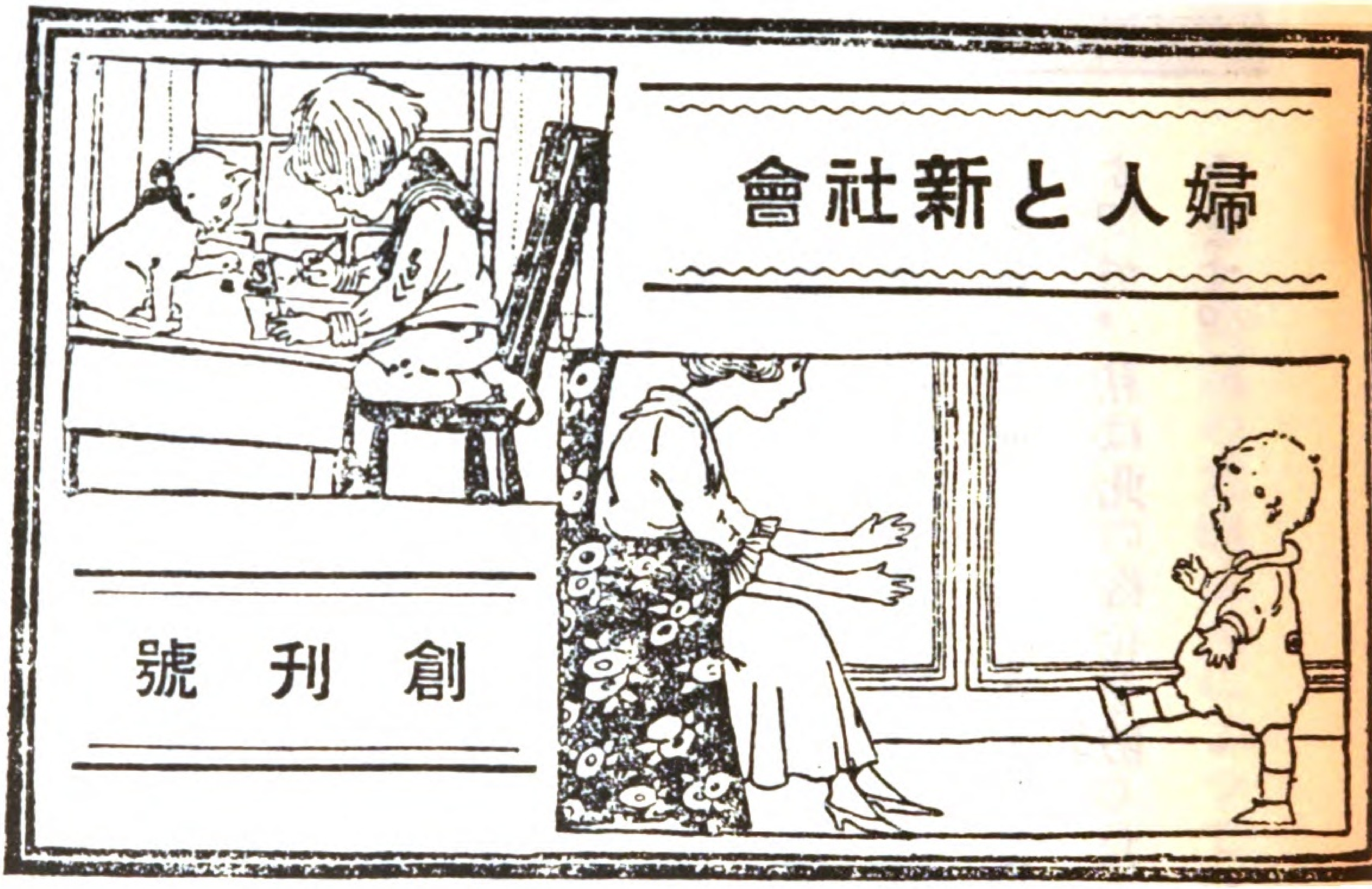
目次大要

發行所

振替東京四一〇七七番

東京市本鄉區湯島四ノ三

東洋出版社



今迄は男と女が別々な道を歩いてゐました。兩者の間の懸隔が餘まりに甚だしくて男女は夫婦となつても手をつないで歩く事が出來なくなつてゐました。毎日々々一ッ屋根の下に住んでゐながら夫は妻を理解せず妻は夫を知らずに過してゐました。

男が無暗に手足を伸して、極端に專門になつてしまつて本當の人生其のものに付ひて考へて見る事もしなくなつてゐる時に、外的に伸びる餘地を阻まれてゐた女は持つて生れた精力をじいッと内部に蓄へてゐました。そして、大部分の男が忘れてしまつてゐた本當の人生をしッかりと見つめてゐました。

實質から云ふと男の持つてゐるものよりも女のもつてゐるもの丶方が遙かに貴い價値あるものであるにも拘らず男は勿論其れを認めません。女自身もそれを知らずにゐました。

女は先づ其れを知らなければなりません。男はそれを認めなければなりません。そして、男と女は手をつながなければなりません。

『婦人と新社會』を發刊するに就いて

兩性の關係に付ひて、又、社會の基礎としての家庭の組織を管理する國家の義務等に付ひて可なり深く研究を進めた人は澤山ありますが、併し、これ等の問題は非常に複雑であり、其の解決は非常に困難であると同時に其の結果は又重大なものでありますから、未だ曾て其れに完全な解決を與へた人はありません。思ふに此の解決は唯單に人の說を並べただけ位ひでは駄目であつて、其れは必ず實生活から出立して研究しなければならないものです。けれども、實生活から出立すると此の微妙な問題が俗化して行く憂があります。で、私は此の俗化を防ぐために出來るだけ科學的に行きたいと思つて居ります。

婦人問題の定義は人によつていろ〳〵に異つて居りますけれども、私は婦人問題の中心は愛であると信じて居ります。英米に於ける婦人問題は女と男と同じやうにならうとする女權の問題でありました。併し、此の頃になつて、女は男とは違ふべきものである、其の違ひを認めさせる事が猶より大なる婦人の權利であり、同時に其れが人類に對する婦人の義務であると云ふ事が分り始めました。

其處で徹底した婦人論者は社會の各一部を代表する所謂文明批評家からは大ひに批評もされ、又、大抵の場合了解されないかも知れませんが、併し、婦人論者の方では彼等の凡てを了解しなければなりまん。了解する計りでなく同情的寛要をもつて彼等を迎へなければなりません。云ひかへれば、婦人論者はそして、婦人論は多方面でなければならないのです。なぜなれば、婦人論は常に家庭の問題を重もに論ずる事になりますが、そうするには各社會

問題を批評する事によつて間接に直接に家庭を論ずる事になるのですから。そして、他方面からせんじつめて來た處の智識が社會と云ふ船を動かす愛と云ふ動力を正當に導く事が出來るのですから。

さて、此の社會と云ふ船は男女間の愛、親子の愛と云ふ原動力を持つて、一體、何處の港へ着かうとするのでせうか？　そして、其の梶は？　其の梶の性質を明らかにし、其の港を探し求めやうとするのが此の『婦人と新社會』の使命なので御座います。

人間は未だ人間でない。唯、此處其處に一ツの星が暗闇を輝し、此處其處に大樹のやうな人間が矮小な人間共を見下してゐる間は人間の目的が遂せられ人間の本當の力が現れてゐるとは思はない。凡ての星が一齊に絶望の夜の暗闇を破つて輝き出た時、凡ての人間が皆等しく其の力を滿開させた時、そして、等しく完全になつた時、其の時に、決して其の時以前ではない、人間が本當の人間になつたのである。

ロバト・ブラオンニング

婦人と社會

山田わか

家庭婦人の意義

子供を皆學校へ出してから、獨り靜かに書齋の机に向つてゐると裏のうちからは赤子の泣き聲が聞へます。をとなりからは片言まじりの子供の聲と子供の氣持ちになりきつてゐる其の子のお母さんの聲とがもつれ合つてゐるのが聞へます。

目をあげると障子の硝子ごしに狹い道路を隔てゝ、冬の朝の日光に頭をテカ〳〵させながら墓掃除をしてゐる老爺が見へます。不圖、私は『婦人の屈從』を書いて女權擁護の大獅子吼をあげたジョン・スチユアート・ミルが妻の死後、妻を葬つた墓地の近くへ家を買つて其處へ移り、毎日々々妻の墓のまわりを淋しそうに逍遙しながら、ありし温き生活の追想に耽りつゝ餘生を送つてゐたと云ふ事を思ひ出しました。

そして、又、直ぐ今泣く赤子をあやなして居る奥さんの夫は、片言まじりの子供を

遊ばせてゐる奥さんの夫はミルのやうに奥さん達を思ふ人達であらうか？と云ふ疑問が私の心に大浪のやうに起つて來るので御座いました。

泣くより外に能のない赤子の苦痛や喜びを自分自身の苦痛や喜びよりも鋭く感じて神經を纖細に働かせて、一寸したはづみにも息の根を止められそうな小さい弱い命を守り育てゝ居る奥さん、人生の苦樂を可なり嘗めさせられた結果他の方面に向つては餘程固くなつてゐる心も愛兒のためにはすッかり柔くなつて、今迄の苦い經驗や現在の世帶の苦しみはけろりと忘れてしまつたやうに子供の心の中に鎔け入つて子供の覺束ない唱歌を一所に歌つてゐる奥さんの生活を、彼女達の夫は理解して居るであらうか？　尊敬して居るであらうか？　と頻に考へられるので御座いました。

母が自分の命に代へても幼兒を保護し、其の子が稍長じては、母は我が子の行末にあやまち少く幸多きを願つて自分のありッたけの智識や經驗を子供に注入します。そうする事によつて社會は其の生命を續け進歩をして行きます。

世の中で最も美しいものは徹底した利他主義です。教へ子の危險と見ては自分を忘れ、火の中でも水の中でも飛び込むやうな敎師はいつも社會の稱贊と同情を集中致します。敎化された、そして、二十世紀の文明を持つた現代人が今猶昔の俠客や武士の行爲に（其のかたちは馬鹿氣て居ると知つても）血を沸かし共鳴するのは何故でせう其處に貴い利他主義の精神があふれ出て居るからです。

他人と他人との間にそう云ふ利他主義が行はれる事はめつたにない。それは暗夜の星のやうなものですから、たま／＼其の星を見付けると人は大騷ぎを致します。忽ち、各新聞雜誌の問題となり、小學兒童の話題にも上るやうになります。處が、人は其の貴い星が大抵の家庭には少なくとも一ツは輝いてゐる、つまり、各家庭に於て我が國だけでも何千萬の母が其の星を輝してゐる、則ち、利他主義を現に實行しつゝあると云ふ事に氣が付ひてゐません。

母が子を思ふ情を持つてゐるのはあらゆる生物に共通な事實で敢へてめづらしい事

ではない、それは本能だからと云ふ人があるかと知れません。成程、動物の母の子に對する情も隨分强いものに相違ありません。哺乳中に於ける動物の母の自己犧牲、忍耐、又、子を襲はうとする敵に對する猛烈な力は實際素晴らしいものです。けれども其の子が自分で歩み、自分で食物をとる事が出來るやうになると動物の母は今迄持つてゐた子に對する愛情をきれいに何處かへ捨てゝしまつて、自分の子供も子供以外の同族も少しも區別が付かなくなつてしまいます。動物の母の愛は子供に生理上の保護が必要である間だけです。ですから、動物のうちには進歩がない、千年前の犬猫も今日の犬猫も同じであるのです。

人間の母の愛情も本能には相違ありません。けれども、人間の母の其の本能には精神的の力が加はつてゐます。其の力によつて彼女の智力や肉體は活躍致します。そして、彼女が子に與へる精神的の愛は不朽なものです。これあるがために人間には進歩があるのです。基督教は人類に於ける此の母の愛の價値を認めまして、そして、聖母

マリアを拜みます。マリアは凡ての母の典型です。彼女はあらゆる事柄を理解し、そして、あらゆる罪を許します。ですから、人類は男も女も子供も皆一點の曇りもない信用を彼女に置いて彼女に近いて行きます。

セント・オガステンの母モニカが我が子のために流す涙を見て、アンブロス僧正は『それ程熱き涙を流す母の子息はどんな邪道に入つてゐても必ず救はれます』と云ひました。そして、オガステンは其の涙に救はれました。母モニカがなかつたならばあの偉大なセント・オガステンはなかつたと云ふので世界の定評であります。

さて、この母の力が人類の進歩である事は前にも申ました。それが直ちに社會の向上です。もし、今日の世界の、そして、我が國の傾向であるやうに、婦人自らは『家事育兒』など云つて其れをつまらない事であるやうに考へ、男子は男子で家庭婦人の仕事の意義を知らず從つて尊敬せずに居る事があらゆる禍の源である事を私は痛切に感じるもので御座います。社會上のあらゆる問題は家庭から始まつて家庭に歸へる

ものである事を私は信じるもので御座います。

例外は勿論ありますが押並べて男は、殊に、我が國の男は皆ゐんだらであるやうです。蓄妾に遊蕩に浮身をやつす事を以て人生の最大快樂であるやうに大部分の男は心得てゐます。そして、自分等のため社會のため最重大な任務を負ふ妻に苦惱の盃を呑まする事を何とも思つてゐません。　なぜでせう？

『結婚は戀愛の墓である。』などと云ふ誤まつた考へに頭を毒されてゐるからではないでせうか？

戀愛と結婚

戀愛は必ず結婚を目的とし、結婚は必ず家庭の建設を目的としなければならない事は勿論です。結婚を目的としない戀愛は其れがどんなに純粋なものであつても要するに一時のいたづらに過ぎません。フラ〳〵した浮草のやうな戀愛も結婚によつて其の根を生やし、そして、其の根を強固にしなければなりません。

社會の進歩に貢獻し得るやうな高尙な健全な偉大な戀愛は結婚によつて夫婦の愛に迄成長して始めて完成したものです。そして、其の戀愛の完成には少なくとも十年の年月を要するものだと私は考へます。そして、それには必ず夫婦の同棲が必要です。どんなに相愛する仲であつてもお互ひに異つた事情の下に生れ、異つた境遇の下に人となつて居りますから其の性情、其の趣味に違ひのあるのは當然です。それを同情と云ふ寛和劑のために補へたり補はれたりすると同時に、社會に對する義務、人類に對する奉仕が支へとなつて、そして、其處に戀愛のある完全に近い夫婦が出來上がつて行くのです。

けれども、今日の多くの男のやうに我慾我執を押し通そうとするやうな傲慢な野蠻的戀愛觀念を持つてゐたのでは到底本當に愛したり愛されたりする事は出來ません。そう云ふ男は利他主義の養成所でなければならない家庭を造る資格はありません。なぜなれば、そう云ふ男は家庭を利己主義を享樂させる處、氣まぐれを實行する處と心

得てゐるに相違ないのですから。
　この雜誌の卷頭の一文のうちに『婦人問題の中心は愛である』と私は申ましたが、今日この愛のために苦しんでゐるものは男子よりもむしろ婦人に多いと云ふ事は、男子よりも多くの場合婦人の方がより純粹な愛の持主であり、又、二ッには男子よりも婦人の方が子供に對し、則ち、次代に對して責任が重い證據であると私は思つて居ります。ですから、此の戀愛に對し、結婚に對し、又、家庭に對する自覺は男子よりも婦人が先きである筈です。そして、先きでなければなりません。婦人の覺醒と云ふ事は要するに其の自覺に外ならないのです。
　一體、この社會に存在する數ある諸制度のうちで家庭程人の心に深い根を張つてゐるものはありません。又、家庭程深い意義を持つてゐるものはないのです。そして、家庭と社會との關係は交感神經系と心理生理作用との關係のやうなものでありまして、人間の幸不幸、社會の良不良は家庭の質の善惡によつて定まるものであると云ふ

事を私は今迄幾度も〳〵機會ある毎に繰り返へして參りました。

社會問題の研究や運動に全力を注いでゐる人達が、まるで忘れてしまつてゐるものゝやうに少しも家庭の問題、又、其の家庭を淸く美しく温くする戀愛の問題に觸れて來なかつたのはどうした事でせう。私は、それ等の研究者や運動者が大抵の場合男性であり、又、偶々それが女性であつても其の女性の研究者や運動者が唯單なる男性の模倣であつて女性としての立場、女性としての經驗から出立してゐなかつたからであろうと考へます。

どんなに外交が調子よく運ばれても、理想的な政治が施かれても、最高な學問が普及されても各人の家庭が亂れてゐて夫婦親子がしつくり折り合ふ事が出來なかつたならば人は決して幸福ではありません。從つて社會は平和でありません。

人は家庭に生れ家庭に育ちそして現に家庭を持ちながら、家庭の問題はまるで自分等とは全く關係がないものゝやうに心の表に浮べて見る事すらしませんが、それは家

庭と云ふものが餘まり人に接近しすぎてゐる處から、所謂燈臺下暗しで氣が付かないのかも知れませんが、又、一ッには家庭と云ふものは人間が其の始めに有識に造らうと思つて造つたものでなく、丁度、身體の諸機關が生れながらに備つてゐるやうに生れながらに無意識のうちから喰ッ付ひてゐたのでツイ氣が付かずにゐたのかも知れませんが、併し、それが所謂無自覺の狀態にあると云ふものです。で、今日の此の渾沌たる時代に於ては各人が覺醒しなければなりませんが殊に婦人が此の家庭の任務に付ひて一日も早く自覺しなければなりません。又、し得ると私は信じて居ります。

最も西洋には昔の家庭の歷史や其の構造の研究が隨分澤山ありますが、併し、それは過去の家庭のいろ〳〵な形式が發見されただけで、そして、其の數が餘まり多いために却つて本當の家庭の意義を掴むのが困難であるやうな有樣であります。けれども家庭は生きた文明の細胞です。ですから、他の生物又は他の社會制度と同じやうに家庭も進化を經つゝある事は勿論です。

家庭は元始時代から人間の本能となつてゐる地方愛、所有愛、及び、親となりたいと云ふ慾望を滿足させる處でしていはば傳說の一束、一種の精神的の構造物になつて居ります。ですから、家庭は思想と目的の集合體であるのです。處で、今日の家庭が人間生活の重なる思想や目的を有機的に持つて居るか、どうかが實に疑はしくなつて來てゐます。と云ふのは個人主義的思想や女權擴張の潮流やの影響を受けて、家庭と云ふものは多くの動物のかたちと同じやうに、一ツの未開時代の遺物であつて、それは、追々全く性質の違つたものになるか或ひは此の社會から全然消へ失せてしまうべきものであるやうに考へてゐる人達が今は少なくないのですから。けれども、私はそう云ふやうに家庭を輕く見てゐる人に問はうと思ひます。

人間がこの家庭と云ふかたちを造り上げた理由、又、家庭に於て開始時代から今日迄に養はれて來た人間性はそう簡單に磨り消し得るものであるかどうか？　又、家庭に於て養はれた其の人間性を磨り消す事が、人類の幸福となり得るものであるかどう

か？　且つ又、家庭に經續性を與へた傳說や思想は、全人類の幸福のため高尙な愛國的なものだと考へるよりは、それは無價値な意味の狹い利己的なものだと考へる方が個人のため社會のため有益であるかどうか？

社會改革家が家庭の改造や、又は、社會變化が家庭に及ぼす影響に付ひての問題にぶつかつた時、彼等はいつも今私があげた質問の前には立ち止まらなければならないと私は思つてゐます。

家庭の倫理的作用

社會の幸福は、其の社會を形成してゐる個人の本能や、習慣や目的が社會の利益になるやうに造られるか造られないかによつて、定まるものであります。そして、それは個人々々の意志によつて造られるものです。それから、眞理、美、乃至友情と云ふやうなものが其れを完成させるものであります。けれども、其の眞理、美、又は友情

と云ふやうなものは有形物のやうに其の持手の心持ちや選擇に關係なく、外部から人々の心のうちに投げ込まれるやうなものではありません。それは精神的のものでありますから人々の心によつて選擇され、そして、其れが人々の努力の原則となつた時にのみ其の眞理と美と友情は價値あるものとなります。

で、社會制度の價値は、人々の不安定な混雜した本能の働きから、云ひかへれば不完全な有害な人々の習慣から彼等を、脱せしむるための道具となつて始めて定まります。道德上の發達と云ふのは個人の意志と愛慾が、社會の意志と愛慾に一致するのを云ふのです。一個人の意志と愛慾が正當なものであるならば、彼の善と社會の善との間に區別はない筈です。人間の最も深いそして廣い利益は同胞との一致である筈ですから。或る哲學者は人間にとつて最も必要なものは矢張り人間であると申しました。自分に必要である自分以外の人間が幸福である事は、とりも直さず自分の幸福なのですから。

人は道德界、及び、智力界に於て一歩々々と空想から誘き出されねばなりません。道

德界及び、智力界に於て最も重用な進歩と云ふのは其の空想を破る事であります。人は自然の愛、生れながらに持つてゐる愛を通して社會的の愛を學ばねばなりません。則ち社會に興味を持つ事が、自分自身の利益であると云ふ事を悟らなければなりません。凡て、個人的であるものを社會化するには、先づ第一にそれを道德化する必要がありますが、この人間が生れながらに持つてゐる愛を社會化するには矢張り先づ第一に其の自然的な愛を道德化しなければなりません。そして、それは家庭でなくては出來ない事です。家庭は社會的愛を養成する苗床です。人間の利己主義の本能を利他主義の本能に變へて行く無二の機關は家庭の外にはありません。

家庭は先づ第一に兩性の愛の生活が營まれる處です。そして、やがては親としての愛が活動する處です。子供が生れるや否や兩親は子供と社會とを接觸させるなかだちとなります。新しい時代と古い時代との間には、殊に今日のやうに混亂してゐる時代には、其處に一筋の連絡線がないやうに思へます。が、そう思へると云ふのが旣でに

今日の家庭がしつかりして居ない證據です。各家庭は古い時代と新しい時代とを繋ぐ鏈の環の一ッでなければならない、そして、其の環は淸い確實なものでなければならないと云ふ事を今日のこの過度期に於ける婦人は自覺しなければなりません。

子供が生れると云ふ事は肉體的には母と子の分離ですが、併し、心の分離はありません。親は子に生理上の命を與へたと同じやうに精神上の命も與へます。子に對する親の笑み、涙、そして、接觸には精神と道理の力が加はつてゐます。そして、其の精神と道理の力は親の又親代々から傳つて來たものです。動物には其れがありません。この精神的の愛が父母の榮光であるのです。

それから又子供は單に受動的で兩親から與へられる計りであるやうに一寸は思へますが、そうではありません。第一子供は兩親の心に新しい光と新らしい深味を與へます。そして、子供の無かつた時とは違つた世界を兩親に持たしめます。もし、兩親がまッすぐな心を持つて子供を眺めますならば彼等は親となる前とは違つた人間になつ

てゐます。子供に對する本能的な尊敬心は最惡な人の心の上にも深い感化を與へるものです。人間の野蠻的な本能も、人間が先天的に持つてゐる家庭の觀念から來る情緒則ち、親が子を尊敬する情緒には勝てないものだと云はれてゐます。

この家庭の觀念から來る情緒、子を尊敬する情緒が開始時代の殆んど無意識であつた人間にもあつたとすれば、今日のずッと有識になつてゐる時代には、勿論、それがずッと強いものになつてゐていゝわけです。スペンサーは『人間の精神的發達の最後のステージは親としての義務を適當に果す事によつてのみ達せらるものである。』と云つてゐます。實に私共の注意しなければならない事は、家庭愛の感化力は子供の上にと同じやうに兩親の上にも重大なる影響を與へるものであると云ふ事で御座います。

社會主義と家庭

社會主義の哲學、社會主義の運動は現在の私有財産制度を破壞して、生産の要具を

集合的所有となし集合的に經營し、そして、各人が各人の能力に從つて勞働をし、各人の必要に從つて分配しやうとするのです。

處で、この各人の必要に從つてと云ふ事は、隨分難しい問題であるに相違ありません。各人の必要に從つてと云ふ事は各人の必要が皆同じであると云ふ事を先づ假定して置かなければなりますまい。けれども、各人の必要が皆同じであると云ふ事は想像出來ない事です。男も女も老人も子供も學者も政治家も軍人も勞働者も農夫も商人も皆同じであると假定するのは無理な事であるし、又、其處にいゝ加減な區別を立てるならば彼方からも此方からも絶へず苦情の起つて來る事は明らかな事であるでせう。

又、各人の能力に從つて勞働すると云ふ事も、隨分難しい事であるに相違ありません。もし、各人が報酬があつても無くても賞罰があつても無くても、唯々自分の良心に從つて社會的奉仕と云ふ義務觀念から自分の持つてゐる能力を一杯出して働く事が出來る程道德的な人間になつてゐるならば世の中には何にも問題が起らない筈です。

そう云ふ善良な人間から此の社會が成り立つてゐるならば社會主義も何主義もてんで必要はありません。社會組織のかたちが何であつても不都合が起りやう筈がないのですから、彼等は怠ける事をせず貪る事もしいのですから、利用されたり虐げられたりする人もありやう筈がありませんから。

けれども、今の大多數の人間に勞働と報酬とを全く別なものにして置いたならば其の結果はどうなるでせう。彼等の努力は止んでしまいはしないでせうか？　直接な報酬と云ふ刺戟物なしには働かない、他人の隙に乘じて樂をしやうと云ふのが今日の大多數の人間の性質ではないでせうか？　そして、此處にいろ／＼な問題が起るのではないでせうか

處で、直接の報酬がなくても自分の最善を盡して働き、そして、能率をあげるあげないに拘らず一人々々の必要に從つて、少しの苦情もなく分配をする事は一家庭内では實行出來ます。現に何處でも實行して居ます。生産のためには少しも役に立たにい

老人や子供が最大の生產能率をあげてゐる一家のうちの壯年の人よりも多くの物資を使用しても格別問題が起らないのは家庭內だけです。

ですから、社會主義者の夢想してゐるやうな社會は、人間が家庭に於て利他主義の本能を養はれ共同生活の訓練を經た後ならば、つまり、今の家庭生活の精神を押しひろげて、社會を一大家庭と考へ得るやうに各人がなり得るならば、或ひは實現出來ないものでもないかも知れません。

處が、多くの社會主義者のやうに婦人の所謂經濟上の獨立を主張し、男子と同じやうに屋外の勞働に從事するならば、利他主義の本能を養ひ共同生活を訓練する家庭と云ふものがまとまつて行きませんが、それはどうしたものでせう。

其處で、私は、先づ何は置いても國民が健全な家庭を建設し得るやうに努力する事が第一義の仕事であると考へます。政治も經濟も敎育も女權の擴張も皆其處へもとゞかせなければならないものだと信じるもので御座います。

文化と文明

G. Ratzenhofer

文化と文明との區別は既でにアリストトル時代からはつきりしてゐたものである。社會を解剖するに當つては先づ此の區別を明らかにして置く事が重要であるにも拘らず、併し、大抵の場合それは無視され混同されてゐた。

文化はものを完成する。そして、文明は其完成されたものを出來るだけ多くの人間に使用させるのである。則ち、社會化するのである。文化は無數の奴隷を犠牲にして途方もない大きな金字塔を造つたり、公園や博物館や圖書館や繪畫展覽會を造つたりする。そして、文化の造つたそれ等のものを無數の人に樂しませるのが文明である。であるから、文化の享樂を妨げると云ふ事は文明の進運を阻む事になるので、其の文化の享樂を制限しやうとするものは其れが何であろうとも制限したゞけ其れだけ、社

會進化の過程の上に爭鬪を起すものである。文化の利益を延長するものは其れが何であらうとも、延長したゞけ其れだけ全體の社會進化の上に衝突の調節、共同、則ち、文明の增進があるのである。

文化と文明は相對峙する言葉と理解してはいけない。文化と文明は同じ平面に並べる事の出來ない言葉である。文化は機械學的概念であり、文明は道德的概念である。文化は手段の總轄で、文明は目的の總轄である。文化それ自身は道德には無頓着である。文化は文明を增進するためにも、又は、文明を妨げるためにも用ひられ得る。

文明に反對な傾向を名稱してグンプロビッチは野蠻主義と云つた。文明は社會的の功績の全部を意味するが、野蠻主義は文化を社會的に有益に利用する事を阻んだり反對したりする。

文明は社會進化の生產的則ち建設的な內容であり、野蠻主義は社會進化の經路に於ける消費的な破壞的な不完全な產物である。云ひ直せば、人の行爲が精神的に乃至は

物質的に富源の增進となるならば其れは生産的、建設的或ひは文明的であるのである。これに反して、土地を使ひきつたり、物資を無駄にしたり、道德性を鈍らせる行爲は不生産的、破壞的、そして、野蠻的であるのである。

單なる形式的の分類として此處に現した此の區別も我々の行爲の價値を一々試驗するには重要なものである。或る時代の、或る國民の、又は、或る階級の、或ひは又一個人の行爲の價値を批評するに當つて最も大きな誤まりの一ツは其の價値の標準として文明を採用する事の代りに文化を採用する處から來る。

昨日迄の露國を一ツとして考へて見るならば其れは一個の偉大なる文化組織であつた。其の文化的露國は少數の人が豐富で有力で、そして精練されてあるために自然の富源と民力とが全く利用されてゐたのである。故に、他の國の大多數の思想家は昨日迄の露國を半野蠻國として階級づける。何となれば露國々家が使用してゐた文化は全國民を發達させる手段としては餘まりに制限されてゐたから。露國の文化は、むしろ

國民を貧乏に無學に、そして奴隷的になす手段であつたから。

これに反して、米國は殊に建國の際の米國は文明が文化よりも進んでゐる國の例である。米國民の所有してゐた技術、則ち、文化は幼稚なものであつた。農業、工業、漁業、敎育、政治は皆幼稚であつた。けれども、其等の技術の貧弱にも拘らず、米國は人の價値を保證するものがあつた。そして、其れが平等であつた。そして、其の保證の範圍は何處の國にも例のない程廣いものであつた。則ち、米國は最大なる文明を持つてゐたのである。

野蠻主義と社會的爭闘とは相關係してゐるものである。これに反して文明は共同である。文化が國民の一部に獨占されてゐる間は其の國は未だ半野蠻國と云はれなければならない。

であるから、社會の進んで行く經路を解剖しやうとするならば、唯單に其の經路のかたち計りに重きを置きすぎてはいけない。多くはそうしがちであるが。其の經路の

如何なる部分を觀察するにしても、實際に意義のある處は其處に活動してゐる運動の形式ではなく其の內容、則ち、實質でなければならない。其の內容、則ち、實質とは其の運動の動力であり、材料であり、又同時に產物である人物の種類と其の狀態である。社會進化の經路のうちの爭鬪の狀態から共同の狀態に振り向いて見ると其處には唯單に一ッの社會的の反動から他のもう一ッの社會的の反動に移ると云ふやうな單なる變遷ではなく其れ以上のものゝある事が分る。普通の意味で變化と云ふとそれは進化の經路、則ち、單なる方法に重きを置くよりは、むしろ、其の方法が現在に於て何を爲しつゝあるかを觀察する事に重きを置く事になる。

其處で、文明は社會進化の內容――社會進化の內容と云へばウォードの云ふ功績を意味するが――則ち人間の共同的行爲の積極的な結果である、文明は物質的な尺度でなく、人間的な尺度によつて計られた、人間としての目的への到達、又は、人間としての完成の綜括であり、そして、組織である。これに反して、文化は第一義の意味に

於ては機械的、智力的、及び道德的技術の道具、則はち、文明建設のための準備である。各時代の人間が此の道具則ち裝置の全體を使用して彼等の人間としての目的を達するのである。

第二義の意味に於ては文化は功績のうちに含まれねばならぬものである。一時代に迄進んで來た社會進化の過程の內容、則ち、文明は、次の時代の文化、則ち、其の進化を續けて行く道具となる。云ひかへれば、文化は人間が彼等の個人的或ひは社會的の目的を增進しやうとする手段を云ひ、文明は其の目的を增進しやうとする個人々々の努力の凡ての結果を云ふのである。

故に、文明は精神的產物の方面から見た社會進化である。こう云ふやうに理解して見れば文明と云ふ言葉は社會進化の內容を解釋し、そして、文化と云ふ言葉は功績の方面から見た社會進化の經路と、それから、目的のために手段を應用する進化的方法として見た社會進化との間をはツきりと區別する。目的のための手段と云ふけれども併し、純粹な意味で云ふ文化は目的の方には重きを置いてゐないのである。(わか譯)

心のかげ

原田琴子

×

ある夏の一日であつた。東京の學校へ入學るために上京した私は、父と一緒に、銀座の街を歩いてゐた。陽の光はあつかつた、そして電車のゴウと走る毎に煙のやうな砂塵が濛々と舞ひ昇つて、路行く人々の姿を見え難くした。私も父も汗びつしよりになつてゐた。時は丁度正午を過ぎ、私達は空腹でそしてくたびれてゐた。父は時に立止つてあたりを眺めては適當なたべものやを探すらしかつた。父は天ぷらとか鰻とかさういふしつこい食物が特に好きなのであつた――けれどもその父は天金の前をも默つて通り過ぎ、なほお濠の方へと私を運れて行つた、そして遂に日比谷のMまで行つ

て私達はおすしをたべてその時のおひるをすませた。父は私が母に似ておすしの好きなことをちやんと覺えてゐたのであつた。額の汗を拭きながらまづさうにして、おすしをつまんでゐた。その時の父の顏は忘れ難いものとなつて、今も私の記憶に殘つてゐる。

×

夏の夕方母は井戸端で忙しさうにうりもみをきざんでゐた。髮をおたばこぼんにゆつて赤い塗下駄をはいた私はそのそばに立つて眺めてゐた。私の眼はたゞ無心に母の上手な手もとに注がれた。野原の草木はみづ〳〵しく生い茂つて吹く風はそぞろ肌に涼しかつた。私の唇にはひとりでにみじかい小唄がうたはれるのであつた。その時ふと一つの考へが私の心に湧いて來た。思ひつくと同時に私は兎のやうに跳ねて裏庭の方へと行つた、そしてそこの垣根ぎはに私の丈よりも高くぼう〳〵と繁つてゐる紫蘇の葉を摘みとりにかゝつた。少しの間に廣い大きな葉は手にあまる程もぎとられた。今

の今まで思ひもよらなかつた喜びのためにふるえながら、再び私は出來る限りの速さで母の居る井戸端へとかへるのであつた。母の笑顔をば心一杯に豫期して。

×

私の住んで居るところは戸山ヶ原に近い。けれど私はそこへ散歩に行かうといふことをあまり思ひつかなかつた。戸山ヶ原といへばすぐに射的場、練兵といふことが聯想されて何となく不愉快に思へたからでもあらう、また私の持前の出無精からでもあらう。がある休日、誘はれるまゝに私は出かけて行つた。空氣は重いけれども陽のあたゝかい、風のない静かな日であつた。下戸塚の方から霜どけのひどい路を通つて行くと冬枯れの寂しい廣い草原が向ふに見える。晴れた大空の下に人々の黒い姿が點々と動いてゐる。

その草原の小高い丘の上に立つて私は一小隊の兵士の練兵の様を、暫らく眺めてゐた、小隊長がしきりに何か説明するらしい聲はよく聞えたが、その意味は分らなかつ

た。兵士の態度はいかにも從順であり、また眞摯で熱心であるやうに見えた。しばらく見物して居るうちに私は、何となく涙ぐましい思いに打たれた。明らかに何事にか感激した心持であつた。がやがて追ひかけるやうな疑惑に襲はれた。

私は日頃戰爭といふものを嫌つてゐた、ひいて戰ふこと、人を害することを以て職業とする『軍人』といふ人々に對して好い感じを持つことが出來なかつた、否寧ろ一種の反感をさへ懷いてゐた。けれどそれにも拘らず今この戰ふことを練習する光景を見て感激するとは何故であらう！　私は私の弟の一人が軍職を奉ずる者であつて、そして私は日頃その弟に對して特に好い感じを寄せて居ることを今更のやうに思ひ出した。また文字を覺えてから今までに私は多くの戰爭物語に依つて幾度か感激し昂奮させられてゐたことを思ひ出した。

軍人は氣の毒な犧牲者であると或る人々は云ふ、私も左樣思つてゐた、今日の文化の程度が軍備の廢止を許さないのだと諦めての上で。けれども氣の毒な犧牲者――そ

の不幸な、あはれみを寄せるべき人々から何故に私達は殆ど崇高に近い感じを懷かせられるのであらうか。

戰爭は人間の掠奪を好む本能性に依て起るものだらうか、昔は左樣であつたであらう、けれども今日の戰爭といふものを考へたときにはさう一概に簡單に云つてはしまはれまい。愛國主義の道德を心から遵奉して一身を賭して戰場に赴く人々を、なんで私達は特に野蠻性の强い未開人であると言ひきれようか。

私はソロ〳〵と小丘を下りて野原の他の方面へと步を運んで行つた。そこにはやはり兵士達が枯草の上に伏して射擊の稽古をしてゐた。見物する人々の數は一層多かつた、が私は最早それをたゝずんで眺めてゐる勇氣もなかつた。默つて一層憂鬱な思ひに思ひ沈みながらなるべく人氣の少なさうな方へと脫れて行つた。午後の疲れたやうな陽の光がものかなしく眼に浸みた。

×

ある日外出した時であつた。私の乘つてゐた電車は旣に滿員であるのにある停留所で勞働者らしい數人の人々がドャ〳〵と乘り込んだために、その上一層に混雜した。片隅に腰かけてゐた私は立つて居る人達が押しつ押されつして波のやうに動くのを見た、『押すな〳〵』といふ聲が聞えた、かと思ふと『押すなつたつて俺一人が押すのぢや無え、押されるのがいやならすいた電車へ乘れ』といふ尖つた聲が叫んだ。『馬鹿あいへ、今時すいた電車なんぞあるもんか』こんな問答がいら〳〵しく取り交されると聞く間にもうそれは疑ひもなく爭ひであつた、私は憂鬱な心持でそれを聞いて居た。が何といふ不思議にもまた怖ろしいことであらう、私の心はその言ひ爭ひを聞くことに或るかすかな興味を喚び起されたのであつた。その爭ひがはやく鎭まることよりも却て如何樣にか進行せむことを望む心持が起つたのであつた。自ら肯定することは出來なかつたものゝ、とはいへその心持を全く打消すといふわけにはいかなかつた。

×

ある夜、私は老いた祖父と一緒に、東京の街の坂途を歩いて居た。ある事のために二人の心持は全くはなれ〴〵になつて居た、くわしくいへば私は祖父の望む通りに自分の生涯の解決をすることを肯かなんだのであつた。私達は大して云ひ爭ひをしたといふのでもなかつたが、並んで歩いて居てもその心は全く違つて居たのであつた。さうして祖父と一緒に歩くことが苦痛でたまらなかつた私は啞のやうに默つて居た、とふと何事かを思ひ出したやうに愕然とした祖父はいきなり私を顧みて『オウ襟巻を忘れてきたぞ――困つたな』と世にも困難な出來事に出逢つたやうな表情をして立ち止つた。その突差に私はなんともいひやうのないあはれみの思ひに打たれた。祖父はやつぱり私を愛して居るのだ、自分の意に從はないこの私を――と思ふとすぐにもつめたい大地へ膝まついて不孝を詫びたい思ひがした。

普通選擧

婦人參政權を主張するもの丶うちで、勿論これは男子側の賛成者に付ひて云ふのであるが、一九一三年に於ける英國勞働黨の宣言程徹底したものはないと私は思つてゐる。卽ち、それは、婦人をも含めた普通選擧でないならば、其の選擧權は拒むと云ふのである。

此處迄男子が自覺して居るならば、むしろ、婦人は選擧權などを持たずに一步それより進んで、如何にすれば婦人のため子供のため善き政治が施けるかを男子に敎へ政治上の事は男子に任せて置けば却つて婦人のためにも好都合である。

處が、多くの普通選擧の主張者は婦人の參政權を拒んでゐる。男子がそう云ふ態度である間は婦人も參政權を持つ必要があらう。けれども、婦人が參政權を持つた處がそう云ふ態度の男の數が多い間は婦人の要求は思ふやうに通らないに相違ない。

であるから、要は英國の勞働黨のやう

な氣分を男子のうちに、婦人は先づ造つて置かなければならない。

○

一體、我々が代議政體を持つてゐる以上は婦人を含めた普通選擧に行くのが當然である。そして、此の普通選擧の要求は今は人々の生活の殆んど一部になつてしまつてゐるやうである。

處で、此の普通選擧と云ふ事は比較的最近に於て工夫されたものであると云ふ事、又、其の實施の方法に付ひては今猶研究が極く幼稚であり、從つて其の効力に付ひては試驗時代であると云ふ事を人々は忘れて居るやうである。

これは、もと南亞米利加に始まつて、後、合衆國に紹介され、それから後に世界に擴がつて行つたものであるが、併しこの民主々義的政治には少なくとも二ツの偶像が存在してゐるやうである。その一ツは『平等』であるがこの平等と云ふ事がなか〳〵厄倒な問題である。成程人間に上下の區別や男女の區別をする必要はないのであるけれども、其の區別の必

要はないと云ふ、則ち、萬人共通である點は實は極く僅かなものである事を私は信じるから今人々が要求してゐる平等は平等の拜みそこないではないかと云ふ事を考へるのである。もう一ツの偶像は凡ての社會的禍が普通選擧によつて救濟されるやうに思ふ選擧權の崇拜である。

　この二ツの偶像が打ち立てられる必然の結果は選擧機關が絕へず使用されなければならず、其の數も夥しく增加するであらうし、又、施政者の國民に對する責任も稀薄になるであらうから結局入費倒れと無責任の增長が落ちではないかと云ふ事も考へられる。

　デモクラシーは今日迄の處では實際上の成功を見せてゐないにした處が其の存在の理由を持つ力のあるものである事は今日異論はない。併し、其の斷定は、デモクラシーは、其の基礎に於て完全である、デモクラシーは誤まつた責任觀の代りに本當の責任觀を持つものであると云ふ信仰によらなければならない。もし、其の信仰がないならばデモクラシーは虛僞である。

處で、責任は常に投票によつて確立されるものであると云ふ考へが誤まつてゐた事の證據は此の頃ぞく／＼と現れて來てゐる。亞米利加の政治史をのぞいた人は誰でもそれを知つてゐる。責任を確立するためには責任を重んずる人を選まねばならないが、今、選まうとする人が果して其の責任觀の強い人であるか、どうかを識別する事は差し當りの場合には難しい事であるから、選擧の結果によつて有德な適材を得る事は殆んど不可能と云つてよい。各共和國の歷史は皆それを證明してゐる。

一體、代議政體の成功不成功は代議士の責任觀の有無によつて定まり、代議士の責任は責任ある選擧によつて定まる。集合的無責任によつて個人的責任觀を造ると云ふ事は考へられない事であるから。であるから、デモクラシーは個人の場合ひと同じやうに其れ自からの利己主義によつて、倒されるものである。

もし、デモクラシーを成功せしめやうとするならば、前に云つた二ッの偶像を先づ破壞しなければならない。が、思慮

の熟した健實な考へを持つた人は自分が投ずる一票が實際の上に果してどの位の力を持つてゐるものであるかを考へないわけには行かない。人格と智力と能力と雄辯と富に對して其の一票がどの位の力を持つものであるかは餘まりに明瞭であるであらう。

併しながら、人格も智力も能力も雄辯も金力も責任觀の發動には及ぶものでないと云ふ事を我々は承知してゐる。そして、デモクラシーは果して此の責任觀を創造するものであるかどうかを考へなければならない。

○デモクラシーに倣ひてミルは云ふ。『我々は（自分等夫婦と云ふ事です）今は以前程デモクラテックではない。國民敎育が今日のやうに憐れなもので不完全である以上民衆の無智無學を我々は恐れる、殊に民衆の利己主義と殘酷さを恐れる。けれども、我々の理想は勿論デモクラシーを突破してゐる。』（わか）

腕力の法律が男女間の不平等の唯一の源である
ジヨン・スチユアート・ミル

天才が科學と結婚した時にのみ最高な結果が生れる
ハバト・スペシサー

行爲の全部は智識の全部によつて支配される
トマス・バツクル

海外時事評論

戰時勞働婦人の末路

交戰國の婦人の戰事中の働きは實際世界の稱讃を博した。けれど、それ等の婦人達は平和克復後の今日どうして居るであらう。英國に於ては、休戰後の失業婦人の問題は改造案中の重要なものゝ一ッであると云はれてゐる。

殊に多くの若い女達のうちには學業半で學校を去つたものが少くないが、彼女達はもう學校へ歸るには年齡が進み過ぎてゐるし、又、外の職業を學ぶにしても、もう、年をとり過ぎてゐると云ふ事である。

で、文部省では補習學校の制度を設けて其等の女達の將來のためを計らうとしてゐるのだが、處が其等の若い女達の十中八九は戰事中に覺へた生半可な自由思想を振り廻して親や教師や牧師や主人などの云ふ事を聞かないそうである。或る女達はもとの店員などになるのを嫌ひ、

女中などには猶更だそうである。

又、一方、戰爭以前には生活のために働くなど丶は考へても見なかつた中流の女達が戰事中、いろんな職業を覺へたが、そして、休戰後は失業したり收入を減じられたりしたが、併し其等の婦人のうちには戰前彼女達を扶養してゐた夫や父や婚約者を失つたものが少なくなく、剩さへ、物價騰貴で其の困難は一通りでないそうである。何にか智力的の仕事でもあれば其等の婦人のために好都合であるけれども、併し、大した修養を要さない仕事には競爭者が多くて困るし、と云つて、給仕などにもなれず、と云つて働かなければ食へず。で、政府ではそう云ふ婦人達に外國への移住をすゝめてゐると云ふ事である。

一體、婦人の仕事は家庭内に一番需用が多いのであるから、家庭に働く今迄の婦人の位置を高めてそちらの方へ失業婦人を向けやうとする運動もあるし、又、他の一方には婦人の産業聯盟を造つて男子と同じやうに就職出來るやうな工夫をしやうとして運動してゐるものもあるそ

うであるが、とにかく、戰事中世界の稱讃を博した勞働婦人達のこれれが末路なのである。

中流階級同盟

物價騰貴の犧牲が中流階級である事は殆んど各國共通である。で、此の頃歐米に於ては、中流階級運動なるものがだん〳〵擴つて行くやうである。英國では昨年（一九一九）四月中流階級同盟會なるものが設立された。其の議長ケネデー・ジョンス氏は開會の辭のうちに次のやうに云つてゐる。『此の會は市民の家庭上の利益及び政治上の利益を保護するのが目的である。』と。そして、其の綱領のうちに『我々中流階級は一方には資本家の暴利に苦しめられ、一方には勞働者の跋扈に惱まされてゐる。』と。

そして、此の中流階級同盟會の規則の要領を次に擧ぐれば、

第一、凡ての階級相互の利益を計り、
　凡ての階級同等な租稅法を確立する

第二、不公平なる負擔を拒絕し、立法部の不當、產業界の跋扈から中流階

級を保護する。

第三、凡ての法律と其の行政を管理し中流階級が不當に其の利益を害される場合には法律の改正を期する。

第四、中流階級に影響する一般原則の問題に關し、必要なれば訴訟によつて會員の利益を保護する。

事等である。

又、獨逸に於ては、昨年の春、スパルタカス團が勢力を得て、北獨逸を殆んど彼等の支配のもとに置かうとした時に、所謂此の中流階級團體が其れに反對して立つ事を宣言し、それによつて、中流階級は彼等の暴政から逃れたと云ふ事である。

我が國に於ても此の中流階級の運動が必要である事は、私が此處に云ふ迄もない。

亞米利加の禁酒問題と佛蘭西

昨年（一九一九）の十一月の或る雜誌に、佛蘭西の或る禁酒會の會長であり、且つ又、婦人論者として有名なジャン・フィノー氏は亞米利加の禁酒問題に付ひ

て大膽に次のやうに云つてゐる。『突然禁酒を實行すれば、其の害は必ず他の方面に現れる。何百年の間人類が呑みつゞけて來たものを急に禁ずる事は決して策の得たものではない。其の精神に於ては禁酒に反對するものは無いであらう。酒の害の恐しい事は誰でも知つてゐる事であるから。併し、急に禁ずる事の害は其の害よりも一層恐しいものであるに相違ない。從つて禁酒法は成功しないであらう』と。

けれども、フィノー氏は酒の害に付ひては次のやうに云つてゐる。『戰爭以前ですらも佛蘭西勞働者の生産能率は獨逸や亞米利亞の勞働者の半分である。此の狀態の上に猶酒の害が續いたならば我が國民は到底世界の競爭には堪へられなくなる。戰爭中は殊に酒の害はびこつてゐたが其の害は婦人子供の中に迄も擴がつて行つた。一八七〇年と今回の戰爭中の損害よりも猶大なる損害を酒は我が國民に與へてゐる。』と。

そして、又、次のやうに云ふ。

『今や戰爭の禍は止んだ。併し、平和

の禍、則ち・酒の害がます／＼佛蘭西には現れて來た。佛蘭西は經濟的にも生產率に於ても國民的健康に於ても以前よりは強くなければならぬのである。が、酒が佛蘭西國民を衰退せしめつゝある。故に、酒其のものを倒すに非ずんば、則ち禁酒を實行しなければ、酒が佛蘭西を倒す。』と、そして、氏は付け加へて、併し此の酒の害から佛蘭西を救ふは則ち、禁酒の實行は法律の力ではなく婦人の力であると云つてゐる。

暴利取締としての公定物價

各文明國の政府は暴利取締として公定價の組織を應用した、又、應用しやうとしてゐる。けれども、この企ての一般の成功は疑はしいと云はれてゐる。其れに付いてチャーレス・ジー・ウェード氏は濠洲政府の經驗を述べて云ふ。

『公定物價は生產高を減ずると云ふ危險がある。故に、物價を公定するならば政府が生產、分配、及び、交換の機關を所有し管理しなければならない。けれど

も、現代の民主々義的國家に於て其れが行はれるであらうか。もし、國家が經營者になるならば、高い物價に對して消費者を保護する國家の義務と、勞働者の高い賃銀の要求とは必然衝突しなければならない。如何なる内閣がかやうな難問題を圓滿に解決し得るか？」と。

又、氏は、戰爭中ニユウ・サウス・ウエルスに於ける經營を失敗と見て公定物價に反對してゐる。そして、氏は暴利を制裁する他の有效な方法の可能を信じて云ふ。戰爭中に得た生産費を確定する非常な經驗を以て、政府は暴利を貪るものを押へつけなければならない。暴利を貪る形跡のある商人の帳簿を、取調べる權利を政府は確立し、嚴しい罪科を支へる事によつて、暴利を取締る事は可能であると。（わか）

人類の幸福は、此の世界と人類との正しい智識を持つ事によつて得られる。

ウイリアム・グレーム・サムナー

落穂集

×

大阪のK氏は私に書を寄せて『あなたは戀愛中心の家庭主義を説かれますが私のやうに愛する妻に死なれて泣いてゐる男はどうすればいゝのです』と云はれました。あゝ、亡き妻を思ふていつ迄も／＼泣いてゐるやうな男の方が此の世の中に一人でもある事は私共女性にとつてどんなに嬉しい事であるでせう。世間の男は餘まりに早く亡き妻を忘れてしまいますから。どうぞ、いつ迄も／＼其の眞實の涙を流して居て下さる事を私はK氏に御願ひします。御常人には苦しいには相違ないのですが、併し、清い其の涙によつて此の濁つた世の中が餘程浄化されて行く事を私は信じます。私の主張する戀愛中心の家庭主義と云ふのは男の方にそな云ふ態度になつて頂く事を云ふのです。

名古屋のN氏は『私は此の頃、婦人は男に對して同情がないと云ふ事をつく／＼考へ始めました』と云ふやうな意味の御手紙を下さいました。N氏がそう仰有るのは私が京都の或る新聞に二回程放埓な男を制裁する方法に付いて書きましたのを御らんになつたからであろうと想像します。けれども、N樣、私共女性が制裁を加へやうとする男はあなたのやうな品行方正な方ではありません。婦人を虐げ未來を毒すやうな行ひをなさらない方を何で私共が好んで敵視致しませう。敵視處ではない、凡ての男の方が凡ての女の好伴侶になつて頂きたいために、其の好伴侶となるを拒む男子達に唯反省を促す迄です。

×

工場を捨て　家庭の女中になる女工達か此の頃大變殖へたそうですが、私はこれが一時的の現象で終らない事を希望致します。いつかは結婚して母となる若い女達の心と手が機械を扱ふ事に慣れても家事育兒に全く不慣れである事は國民の健康に大きな影響を及ぼさう

ずには置きません。私が娘の時分には地方では一度良家へ家事見習ひとして女は奉公に行かないうちは結婚してはならないもののやうに思つてゐました。それは大變よい習慣であつたと私は今でも思つて居ます。

併し、女中を使ふ人達が今迄のやうな態度であるならば若い女が女中の位置に甘んじてゐない事は餘まりに當然です。私のうちへ近所の臺所を働いてゐる娘さんが毎晩英語を習ひに來ますが私はいつも其の娘さんに云ひます『御自分でうちを持つた時の用意に家事育兒の練習をしながら一日のうちの何時間かを頭を鍊るために御使ひになる事は若い婦人の生活として最も有益です』と云ふやうな事を。

私がそう申ますのは實は私に經驗があるからです。私は女中奉公もしましたし仕立屋の仕事に通つた事もありますが勉強するには女中奉公の方がよかつたのです。仕立屋の仕事は時間で勤めますから朝あわてゝ仕度をして仕事場へかけつけて、終日の座り仕事に根氣を疲らせて、そして、夜勉強する事は樂ではありませんでした。けれども女中をしてゐる時は。朝の仕事をすませて奥さんの御つくりの手傳ひでもして、奥さんが出かけてしまつてから、ゆつくりと手足を伸して本を開く事は、まア、何と云ふ氣持ちのいゝ事であつたでせう。體は充分運動してゐて頭は少しも疲れてゐません。すつきりした頭は目にうつる文字の凡てを一つづゝ吸込んで行くやうな氣持ちがしました。其の時の爽快さは今でも忘れられません。

若い女達が工場を捨てゝ家庭に這入つて來た此の期を外さず。奥さん達が彼女達を優遇し、尊敬し、そして、向上の機會を與へなかつたならば、彼女達は又々女中の位置の不滿から工場の方へ走つて行つてしまうでせう。そして、女性としての無資格者を年々殖やして行く事になるでせう。

それは丁度婦人の職業が一家のためには不都合でも婦人自身は苦しくても國家の將來がどうなろうとも。男から寄生蟲扱ひにされるのが厭さに屋外勞働に出て行く婦人がどん／＼殖へて行くのと同じです。(わか)

血色(ちいろ)の文字 The Scarlet Letter

ホーソン作

ホーソンの靈筆のうちで最も傑出してゐる、そして、アングロサキソン文學に於てのみならず世界の文學に於て殆んど類が無いと云ふ世界での定評ある『血色(ちいろ)の文字』を私は此の誌上に譯出して見やうと思ふ。

ホーソンはマサチユセッツ州セーレムに於て一八〇四年七月四日則ち米國獨立祭の日に生れたのである。此のセーレムと云ふ處は米國清教徒の歴史に於て其の迫害が烈しかつたので有名である。彼の母は非常に美しい目と純な心を持つた美人で、彼の父は船長で、そして温和な無口な讀書好きな人であつた。子供の折り父を失つたホーソンは母と姉妹と共にメイン州に移り、其處の松林のかげで小鳥のやうに自由な生活を送つてゐた。けれどもこう云ふ生活が彼の孤獨を好む習慣をすつかり造つてしまつた。

後に、彼の伯父が最善な學校に彼を送つたのであるが、あの有名なウオーセスター辭典を編纂したウオーセスター博士は彼の教師の一人であつた。一八二五年彼はボードウイン大學を卒業したのであるが、在學中彼はそれ迄の生徒の誰もがした事のないやうないろ〳〵の事をして常に教授連を驚かしてゐたと云ふ事である　卒業後は淋しい、昔、魔法使ひが死刑に處せられた處であるとか、又は、幽靈が出た處だとか云ひ傳へ

られてある場所をしらべ、其の云傳へに付いて研究に耽るのが好きであつた。一度彼は新聞紙を發行したが其れは『一年に十二錢の購讀料で、そして、年六拂ひ』と云ふのであつた。それから、新聞雜誌に筆を執るやうになり、後には稅關の役人となり、それから又領事となつてリバープールへ行つたし、歐洲漫遊もした

故鄕に歸つてからはコンコード丘の麓に落着つひて靜かな樂しい日を送つてゐた。彼の言葉で云へば『夏の熱い日などにはなが〳〵と寢ころんで手にある本や、未だ文字になつてゐない頭の中にある本を讀んだりしながら』彼は一八六四年五月十九日に六十歲で他界の人となつたのであるが彼のなきがらはスリーピー・ハロー（睡氣さす盆地）の墓地にトーローやエマソンと一所に葬つてある。其の墓地は歷史に名高き平野と平和の川と云はれてゐる極めて靜かなコンコード川を眺め下したそして、松林に覆れた丘の中腹にあるのである

ホーソンの非常に鋭敏な神經と感情は現在の世の中が餘まりにあわたゞしく、そして、まぼしいものであつた。で、彼は手で目を覆ふて現在を眺め。そして。いじらしそうな目を過去に投げて、そして、不可思議な普通でない事柄に心をひきつけられる人であつた。であるから、彼は神秘を描き出すに最も適した文體を持つてゐた。ホーソンはノーベリストではない。ノーベルは概念に於て、又、出來上がつた結果に於て常に根本的にローマンスである。けれども、ホーソンのものは精神界の法則にピッタリ合つてゐて、そして、時と場所と其の時々の事情に調和する性質を持つてゐる。

つまり、ホーソンのものは理想的な雰圍氣の中に存在してゐる自然主義的な小說である、小說とは云ひな

がらも彼の書いたものゝ中には中世紀の寺院だとか宮城だとか朝廷だとか或ひは紳士淑女の交際だとか云ふものは出て來ない。けれども、人間の精神と人間とに深い關係を持つてゐる人間の每日の生活、則ち、普通の人間普通の心を持つた人間が活躍してゐるのである。今迄の文明は未だ嘗てホーソンに等しい力を持つたローマンテツクな天才を生んでゐないと云はれてゐる。

ホーソンは仕組や事件には重きを置いてゐない、事件よりも事件其のものが持つてゐる感化力に重きを置いてゐるのである。であるから、ホーソンは肖像を描き出さない。又、冒險的でなく、活動的でもない。併し、彼の扱ふ事柄は奇異であり隱秘である。そして、非常に混雜した動機や感情や傾向のうちに彼の力は現れてゐる。其の點に於いてホーソンはアングロサキソン文學の第一人者であり、始めであり、そして、終りであらうと私は思つてゐる。

獄屋の入口

黑ずんだ着物をきて灰色の上の尖つた帽子をかぶつた髭だらけな多くの男達が、頭巾を被つた或ひは被らない女達も入りまじつて、木造の建物の前に集まつてゐた。其の建物の入口の戶は鐵の大きな金具を付けた樫で重々しく造られてあつた。

新しい植民地の建設者は其の始めの計畫に於て、どんなに有德な幸福な理想鄕を夢みてゐるにしても、墓地と獄舍は矢張り最初からなくてならぬものの二つである。そして、其の處女地の一區域を墓地に、又、他の一區域を獄舍の敷地にして置く事の必要を認めなければならない。ボストンの建設者であつたアイザック・ジョンソンの屋敷內にジョンソンの墓を中心として始めての墓地が出來たと殆んど同時に——其の墓地は後にだん／＼廣がつて行つてキングスチャペルと云はれてゐた禮拜堂の共同墓地となつた——コーンヒルの近くに始めての獄舍が造られたのは矢張り其の原則に從つたのであると云ふ事が容易に相像できる。

この町が出來てから大凡十五年か二十年の後に、木造の其の獄舍の軒の出つぱつた陰鬱な外觀が雨風に打たれた跡や其の他の年月を經たしるしのために一層其の陰鬱さを增してゐるのは、むしろ、當然な事であらう。又、其の樫の扉にとりつけてある鐵の大きな金具のあか銹は此の新しい世界に於ては外の何物よりも古く見ゆる。罪惡に

居するものの凡てに共通であるやうに此の建物は決して其の若い時代を持つた事がないやうに見へる。其の醜い建物と、それから、荷車の輪の跡をとどめた道路との間に其處に一寸した芝生がある。けれども、其の芝生の中にはいろ〳〵な見苦しい雜草がはびこつてゐる。それ等の雜草は、恐らく、文明社會の黒い花、則ち、獄舍を早くに生んだ其の地面に何處か適合した處があるのかも知れない。

處が、其の獄舍の入口の片側に、殆んど、其の敷居ぎわ迄根をはつて、野薔薇の一株がある。それは六月の初旬であつたので、其の薔薇の木は美しい珠玉のやうな蕾を一ぱいつけてゐる。そして、其の蕾は、罪人が此の入口に差しかゝつた時、又は、いよ〳〵刑場にひかれる罪人が此の入口から出て來る時、かんばしい香と優雅な花の美を彼等に送らうとしてゐるやうに見ゆる。大自然の心の奧には彼等に對する憐みと親切とが潛んで居ると云ふ事を知らせるためのやうに。

この薔薇の一株は不思議な運命の廻り合せで此處に生き殘つてゐたに相違ないが、

併し、それは、この薔薇に覆ひかぶさつてゐた恐しい大きな松や樫が打ち倒されてしまつた後迄も、あのすさんだ荒野からの生き殘りであるか、それとも、あの潔いアン・ハッチンソンが無實の罪で此の牢獄につながれた時の彼女の足跡から、彼女の美しい堅固な信仰のしるしとして芽を出して、そして、このやうに成長したものであるかどうか、其れは今は明瞭でない。

いづれにしろ、今、此の物語りを始めやうとする矢先きに、そして、此の牢獄と云ふ不吉な建物の入口に、此の美しい花を見出したので、私はどうしても其の一枝を手折つて、そして、讀者達に捧げたい。そして、この物語りのうちに或ひは見出されるかも知れない或る美しい道徳の花を象徴したい。則ち人間の弱點と悲しみの物語りの暗き終りに幾分の慰藉を得たいのである。（わか譯）

編輯を終りて

ありつたけの智慧を絞つて編輯したのですが何しろ全く無經驗な事ですから編輯と云ふよりも、むしろ、唯、ならべたゞけであろうと思ひます。追々皆樣の御示導を仰いでだん〳〵よくして行きたいと思ひますからどうぞ御氣付きの處をどし〳〵御敎へ下さいますやう皆樣に御願ひして置きます。

○

私は何か書き始めてから八九年になりますが其の間あちらの隅を拜借したりこちらの御仲間へ入れて頂いたり始終店借り計りをして居りましたが今度たとへ小さいながらも自分の此のたましいの家が出來ました事は本當に嬉しい事に相違ありませんで　この上の慾　皆樣をお客樣として御招ぎしたり、又、ゐらしつて下さる方には共同生活のかたちで同居して頂いたりしたいのですが、併し、始めから家計り大きくしてしまつてもし、經費が續かないやうな事になりましては餘まりに悲しい事で御座いますから先づ〳〵小さい處で暫く我慢致しまして其のうちに皆樣の御援助の下に基礎が强固になりましたならば其の時に紙面をずつと擴げまして皆樣に這入つて頂きたいと思ひます。

○

私には一人の姉と一人の妹が御座います。二人とも一度持つた家庭生活が不幸に終りまして私と同居致しました。姉の方は可なり思慮も熟した年頃で御座いましたからどうのこうの云ふ事も少なう御座いましたが妹の方は未だ二十歲の聲を聞いた計りの年頃であつたものですから身の振り方に付ひて又は職業の事に付ひて度々煩悶もありましたし時々無茶を云ひ出したり致しました。其の度毎に私は妹に申しました『私はあなた

の姉であるから又は保護者の位置に居るからと云ふ態度で何でもかでも私の考へをあなたに押しつけるやうな暴慢な事は決してしない。けれども、二人でよく話し合つて見やう。お互ひにありつたけの意見を交換して見て其の結果あなたの考への方が正しいと分つたら私は潔くあなたの説に服します。そのかはり、私の考への方が有利であると云ふ結果になつたら私の方に従つて下さい。』と云ふやうな事を。そして、十年を過して参りましたが先づ／＼妹は結婚に於て職業に於て成功したと云へる處迄参りました。

其處で、私は私と此の妹との關係を押し擴げまして讀者諸氏の妹ともなり姉ともなつてお互ひの考へを此の雑誌を通して交換致しまして相共に此の激浪の中のやうな過度期に處して一歩々々と進歩向上の階段を登つて行きたいと思ひます。で、前にも申ましたやうに此の雑誌の基礎がどうやらかたまりました時にはこれを大きなものにして充分に皆様の御考へを載せさせて頂きますが今の處餘まり手狭で御座いますから、お端書で私の書きます事に對する御不滿やら御疑ひやら御注文やら御注意やらを頂きたう御座います。頂きました御言葉は勿論紙上に上げまして外の讀者の方にも讀んで頂いたり又私も御返事を書いたりしたいと思ひますから。（わか）

本誌定價表

一册	金二十五錢	送料五厘
六册	前金 金壹圓四十錢	（送料共）
十二册	前金 金貳圓七十錢	（送料共）

○誌代及郵稅は前金の事○送金の際は振替貯金東京四一（七七番に御拂込みを乞ふ○郵券代用は五厘切手にて一割增○廣告は御照會次第御相談いたします

大正九年二月二十五日印刷納本
大正九年三月一日發行

東京本郷湯島四ノ三
編輯兼發行人 阿部仙太郎

東京神田仲猿樂町十七
印刷人 大杉直次郎

發行所 東京本郷區湯島四ノ三
東洋出版社
振替東京四一〇七七番

的知識（四）性酵素と性慾（五）發情期の危險なる原因及び之れに對する警戒【第二】性交の攝理（一）ワルドスタイン及びエークレル兩氏の性交反應（二）性交より來る身體的及精神的變化（三）生殖作用に必要なる條件（四）絕對に排斥すべき禁條 1 自瀆 2 不正なる性交 3 其他不自然なる性的行爲【第三】性慾と疾病【第四】結婚の適否【第五】性慾に對する警戒及自覺的抑制法（一）如何に性慾を導くべきか（二）恐るべき自瀆及び其防遏（三）男子過房の危害及び其防遏（四）女子過房の危害及び其防遏（五）飲酒と性慾との關係

山田わか女史著

最新刊

女・人・母

四六版本製
三卅五十頁裝禎美裝
壹圓七拾五錢
送料十二錢

【時事新聞曰く】著者が文明生活に就て婦人の立場より或は女性を論じ母性問題を議し人間の生命を説きたるもの縱橫議論廿五編に至る最近の健全なる思想を得んとする現代の女人に薦む。

【國民新聞曰く】『家庭の危機』以下二十五編の論文を收む皆これ一度新聞雜誌をかりて江湖に示したるものにして啻に婦人界を啓發せるのみならず廣く識者間に傳へられて評判高かりしもの『婦人の自由と云ふ事は徒らに自已を主張するのではなく、もつて生れた愛の力云ひかへれば創造の力を充分に行使し得る自由をいふのであるそして此の不朽の愛の力によつて男も女も幸福を共にし此の愛の力創造の力を子供を通して社會化するのが婦人の重なる仕事なのである社會の禍は愛があまりに個人化した處に釀されてゐる私は婦人の愛の力を通して人間の改造を主張する』云々とこれ著者が其立場を明にしたるもの此一卷の精神基調たり。

【朝日新聞曰く】『家庭の危機』以下『戰後婦人の覺悟』に至る二十五編を收む著者の婦人論は徒らに婦人の權利を主張するものにあらずしてその義務に就て反省を促し婦人の自由は自已を主張するにあらずして天賦の愛の力、創造の力を行使するの自由にありとなし婦人の愛が全世界を抱擁しこれを改造するの力を有するものなるを高調したり現下の婦人評論中最も新しくして溫健なるものといふべし

發行所 東京本郷春木町二丁目 振替東京八二一九番 森江書店

取次所 東京本郷區湯島四ノ三 振替東京四一〇七七番 東洋出版社